堺市立殿馬場中学校　第７３期生　第３学年進路指導通信

豊かに信・伸・心ing

夢と勇気と優しさと　2021・04・16（金）Vol.007

突然ですが、安楽死について

（結論はありません、正解もありませんが･･･）

◆君たちにとっては、「死」は遠い存在だろうし、日々考えることもないと思います。君たちは、若いのでそれでいいと思います。でも年に数回は、生きるとは？、死ぬとは？、幸福とは？と・・・少し哲学的なことを考える時間があっても良いと考えます。

◆僕の母親は、2010 年に亡くなりました。母に娘（孫）の成人姿を見せたくて、19 歳で着物を着させ、前撮り（二十歳前に成人式の晴れ姿を撮影すること）して、病院まで見せにいった記憶が、鮮明にあります。

◆母は、スキルス性胃がんで年齢的なこともあり、手術もできず死を待つ状態でした。母は日増しに苦痛が増え、主治医に「はやく、楽にしてもらえませんか」と言っていた。母の最期が苦痛で終わるのが本当につらく、きつい痛み止めを処方すると「お母さんとの会話もできなくなりますよ」とも言われた。

◆治る見込みも０％なら、楽にしてあげたいとも･･･様々僕の姉と悩みました。結局、即効性のある薬を処方してもらったのですが、やはりその副作用で、会話もできず、死期を早めることになったのかもしれません・・・数日後に亡くなりました。

◆自らが「死を選択」することが、どうなのか？　病気を抱える人々の中には、病気と闘い、頑張って生き、新しい出会いなども求めながら、幸せを感じている人たちもいるでしょう。でも記事にもあるように安楽死を望む人たちもいます。母のように･･･

◆安楽死は権利なのか？家族で機会があれば、話し合ってくださいね。

死についての名言も星の数ほどあるが・・・

宇野千代：大正・昭和・平成にかけて活躍した日本の小説家、随筆家。

よく生きることは、よく死ぬことでもある。一生懸命に生きたものは、納得して死を受け容れることが出来る、という意味です。

榎本健一：俳優、歌手、コメディアン。エノケンの愛称で広く全国に知られ「日本の喜劇王」と呼ばれた。

死ぬよりも、生きているほうがよっぽど辛いときが何度もある。それでもなお生きていかねばならないし、また生きる以上は努力しなくてはならない。

明治25年3月25日　第3種郵便物認可　©毎日新聞社 2021（日刊）

MAINICHI
毎日新聞
夕刊
4月10日（土）
2021年（令和3年）
発行所：大阪市北区梅田3丁目4番5号
〒530-8251　電話(06)6345-1551
毎日新聞大阪本社

第49824号

健保取扱　母体保護法指定医
産科　婦人科
飯島病院
院長　飯島　康史
☎06(6211)4114(代)　FAX06(6211)4026
〒542-0082　大阪市中央区島之内2-15-4
（地下鉄堺筋線「日本橋」下車、歩5分・日本橋北詰東入）

スペイン　安楽死合法化

スペイン下院で3月18日、安楽死を合法化する法案が可決された。オランダが2001年4月に世界で初めて安楽死を法制化してから20年となり、欧州では4カ国目になった。近年は欧州での導入も停滞していたが、死の「自己決定」の権利を求める当事者らの訴えにスペインの世論が動いた格好だ。

患者ら訴え　世論8割支持

「きょうからスペイン人はより安らかで自由に眠りにつくことができる。同時に、母の願いが尊重されるよう闘ってきた私たちには、母が苦しんで亡くなってしまったことへの怒りもある」

アルツハイマー病を患い、安楽死を望みながらかなわなかった母を持つダネル・アセル・ロレンテさん(45)は法案可決を受けてAFP通信に語った。

スペイン下院は、医師の薬物投与による安楽死の法案を賛成202、反対141、棄権2で可決。これより前に上院も通過しており、6月に施行される。法律では、回復が見込めない病気で耐え難い苦痛が生じている患者が望んだ場合に安楽死を認める。15日の間を置いて2回の本人の意思表示が必要となる。対象はスペイン国籍保有者や合法的居住者に限定する。

■欧州で4カ国目

欧州ではオランダの後、これまでにベルギーとルクセンブルクが合法化した。スイスは、同様の法律はないものの、医師による「自殺ほう助」の違法性を問わない方針を取る。一方、フランスやイタリアなど、本人の意思により延命措置の停止を認める国もあり、これは「消極的安楽死」などと呼ばれる。

TIO PEPE
POR UNA LEY DE MUERTE VOLUNTARIA
Derecho a morir EN PAZ.
Derecho a morir EN PAZ
Derecho a morir EN PAZ

安楽死合法化の実現を訴え、マドリード市内を行進する人々＝3月、ロイター

自殺を戒めるキリスト教の伝統から、カトリックの多いスペインでは安楽死反対論も根強かった。だが1990年代に、事故で手足がまひしたスペイン人男性、ラモン・サンペドロさんが自ら死を選ぶ権利を主張した法廷闘争などが知られるようになり、議論が活発化した。

サンペドロさんは98年に友人らの手を借りて死を遂げ、04年にはサンペドロさんをモデルにした映画「海を飛ぶ夢」も公開された。その後も患者やその家族らが先頭に立って合法化を訴え、地元紙エルパイスによると、17年の世論調査では約8割が安楽死を支持した。

法制化を主導したのは中道左派の与党・社会労働党だ。同党を率いるサンチェス首相は法案成立を受け、「我々はより人道的で、公正で自由な国になった。社会の広い要請で実現した」とツイッターに書き込んだ。保守派は反発しており、極右政党ボックス(VOX)は憲法裁判所に提訴すると表明した。

一方、医療従事者からは課題も指摘されている。マドリード医師会のマヌエル・マルティネス・セジェス会長は地元メディアに「スペインは（患者らの心身の痛みを取り除く）緩和治療の発達が大変遅れている。適切な緩和治療が受けられない代わりに与えられるのが安楽死だ」と批判した。【パリ久野華代】